

宇都宮大学教育学部附属小学校・幼稚園と 小学校教科「生活」の成立

—生活科成立以前の幼小連携教育課程「総合的学習」単元開発への着目—

丸山 剛史・川島 芳昭・福田 耕平・小笠原 佑・稲川 知美・坂本 修子

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第8号 別刷

2021年8月31日

宇都宮大学教育学部附属小学校・幼稚園と 小学校教科「生活」の成立[†]

—生活科成立以前の幼小連携教育課程「総合的学習」単元開発への着目—

丸山 剛史*・川島 芳昭*・福田 耕平**

小笠原 佑***・稲川 知美****・坂本 修子****

宇都宮大学共同教育学部*

宇都宮大学共同教育学部附属小学校**

前宇都宮大学共同教育学部附属小学校***

宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園****

本稿は、宇都宮大学共同教育学部および同学部附属学校園における生活科共同研究のあり方を検討するため、1970年代末の同附属幼稚園・小学校における幼小連携教育課程開発と小学校教科「生活」成立との関係を明らかにすることを目的とした。附小所蔵資料等を用いて検討した結果、附小は第二期の研究開発学校の一つとして附幼と連携しつつ合科的学習指導「総合的学習」の単元開発に取り組んでいたこと、ここには後の生活科の要素がほぼ網羅されており、原形を形づくったとみられること、合科的学習指導は研究開発学校指定終了後も生活科設置まで継続的に実践されていたこと、等が明らかになった。

キーワード：宇都宮大学、小学校、幼稚園、教科「生活」、教育課程開発

1. 研究の目的および方法

本稿は、宇都宮大学（以下、宇大と略記する）共同教育学部附属小学校（以下、附小と略記する）に

† Tsuyoshi MARUYAMA*, Yoshiaki KAWASHIMA*, Kohei FUKUDA**, Yu OGASAWARA***, Tomomi INAGAWA****, Shuko SAKAMOTO****: Elementary School and Kindergarten attached to the Faculty of Education Utsunomiya University and Elementary School Subject "Living Environment Studies" Established

Keywords: Utsunomiya University, elementary school, kindergarten, school subject "Living Environment Studies", curriculum development

* Cooperative Faculty of Education Utsunomiya University

** The Elementary school Attached to Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

*** Former The Elementary school Attached to Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

**** The Kindergarten Attached to Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University (連絡先: marusan@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

における生活科教育実践研究の方向性を求めて、同校における生活科教育実践研究を歴史的に検討しようとするものである。本稿では、1970年代末の研究開発学校指定研究と小学校教科「生活」（以下、生活科と表記する）の成立との関係を明らかにすることを目的としている。

2018年度から宇大教育学部（現・共同教育学部）と同大学教育学部附属学校園は、共同研究体制を整え、プロジェクトを設けて、共同研究に取り組み始めた¹。プロジェクトの一つに、生活科に関するプロジェクトも設けられ、共同研究の研究テーマを検討してきた。この検討の過程において、『宇都宮大学教育学部附属小学校百十年史』（以下、『百十年史』と略記する）に、附小と附属幼稚園の幼小連携教育課程開発が『『生活科』（仮称）の誕生の基礎にあったと言っても過言ではない』と記されていることがわかった²。これは宇大附属学校園の取り組みが生活科自体の成立に深く関与したことを示唆する記述であり、今回の生活科共同研究にとっても、研究の方向性を考える上で看過できない記述である。すな

わち、かつてのように生活科のあり方に小さくない影響を及ぼすような研究はできないか、ということである。同書では、次のように記されている。やや長い引用となるが、煩をいとわず引用しておく。

昭和五十四年六月十二日、付属幼稚園・本校とが「幼稚園及び小学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発」をするための学園として、文部大臣より指定を受けた。研究委嘱事項は「幼稚園および小学校において、幼児・児童の心身発達に対応して、幼稚園及び小学校の教育課程の研究開発を行う。」ことであった。以後、幼稚園・小学校が協力し、理論・実践の研究が進められた。そして昭和五十五年三月に昭和五十四年度「幼少連携を深める教育課程の研究開発に関する報告書」(第一年次)を作成し、文部省に報告した。以後、昭和五十七年度(第四年次)まで毎年報告書を作成した。研究の内容は、次のようなものであった。

第一年次 ○幼児の発達の姿を考える。 ○教育課程の構造(経験の系統化、経験や活動の構造化、評価 ○五才児の指導計画等)
第二年次 ○情意的側面と幼少連携 ○発達課題(五〜七才児) ○活動や経験の構成内容と五才児の指導計画 ○単元構成のあり方と六才児の教育課程 ○総合的学習のカリキュラム編成 等
第三年次 ○第一・二年次研究のまとめ ○教育計画改善のための保育・授業の分析 ○研究成果に基づく教育課程による保育・授業の実践 等
第四年次 ○総合的学習における実態と考察 ○総合的学習の改善の方法 ○八才児の発達課題の追求 ○二年生から三年生教育への移行 等
以上の研究成果は、文部省で高く評価され、現在検討中の「生活科」(仮称)の誕生の基礎になったと言っても過言ではない。(pp.766-767)

このように、附幼・小の幼少連携教育課程開発は『生活科』(仮称)の誕生の基礎になったと言っても過言ではないとされ、わが国の生活科の成立に小さくない影響を与えたと考えられる。

ところで、生活科成立に関して、吉富芳正・田村学らが『新教科誕生の軌跡 ―生活科の形成過程に関する研究―』(2014年)を著しているが³、同書には宇大附小の校名は登場しない。同書には、「研究開発学校や研究指定校での研究の開始」について、

次のように記されている。

昭和五一年五月、教育課程の改善に資する実証的資料を得るための教育研究開発制度が設けられました。この制度の下で、昭和五一年度から茨城大学教育学部附属小学校はじめ四校で小学校低学年の教科構成等に関わる総合学習などの研究が進められました。また、昭和五二年度から、お茶の水女子大学附属小学校をはじめ三校で小学校教育課程研究指定校として低学年における合科的な指導についての研究が進められました。後に「小学校低学年教育問題懇談会」の検討が開始された昭和五九年七月の時点での両制度の下での研究の蓄積は、それぞれ一五件と一二件になります。(p.22)

『百十年史』には、同小の幼少連携教育課程開発は「生活科(仮称)誕生の基礎になった」と記されていたが、吉富・田村らの著書には宇大附小の校名は登場しない。この記述の相違はいかなることか。

そこで、本稿では、この矛盾とも思える記述の相違を解消すべく、宇大附属学校園と生活科との関係を検討する。宇大附小には、『初等教育公開研究会要項』(各年度、欠号あり)、『研究紀要』(各年度)、『研究論集』(各年度)等の資料が残されており、1970年代から1989年の生活科成立までの状況を確認できる資料が残されている。本稿では、これらの資料を用いて、可能な限り、宇大附属学校園の幼少連携教育課程開発と生活科成立との関係を検討することとする。

2. 小学校低学年教科構成研究開発学校

吉富・田村らは、上記の著書に先立ち、研究報告書『平成22年度～平成24年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 生活科の形成過程に関する研究 ―協力者会議資料や協力者インタビュー調査等を通して―』(研究代表者・吉富芳正、2013年)を作成していた。同報告書に1970年代後半以降の「小学校低学年の教科構成等をテーマにした研究開発学校」の学校名とテーマが掲載されている。ここには宇大附小も含まれていた。掲げられた研究開発学校名と指定年度は次のとおりである⁴。

1976-78年度

茨城大学教育学部附属小学校

「総合的学習」「生活」

神戸大学教育学部附属明石小学校

「総合科Ⅰ・Ⅱ」

香川県坂出市立中央小学校「総合学習(くらし)」

福井県武生市立武生西小学校 「活動学習」

1977-79年度

千葉県館山市立北条小学校 「総合学習」

文教大学附属小学校 「総合的学習」

1977-80年度

新潟県上越市立大手町小学校
「生活活動」「創芸」

1979-1981年度

宇都宮大学教育学部附属小学校 「総合的学習」

鹿児島大学教育学部附属小学校 「総合学習」

長野県松本市立本郷小学校 「総合的学習」

宮城県仙台市立上杉山通小学校 「生活」

1980-1982年度

福井県勝山市立成器西小学校「生活」「仲よし」

奈良県榛原町立灰原小学校
「しぜんとくらし科」

1982-1984年度

石川県加賀市立動橋小学校 「生活」

香川大学教育学部附属高松小学校
「総合学習」「輪の時間」

吉富らの作成した資料を見る限りでは、研究開発学校指定は1976年度から始まり、開始年度で4期(第一期:1977年度開始、第二期:1979年度開始、第三期:1980年度開始、第四期:1982年度開始)に分けられる。宇大附小は「小学校低学年の教科構成等をテーマにした研究開発学校」の一つであり、茨城大学教育学部附小等に続く、第二期の研究開発学校の一つであり、テーマは「総合的学習」であった。

3. 宇大附幼・小の「総合的学習」カリキュラム開発

次に、宇大附小所蔵資料に拠り詳細を検討する。

(1) 1979年度

確認した限りでは、同校所蔵資料で低学年の教科横断的指導ないしは合科的指導に関する最も古い資料は、同校『初等教育公開研究会要項 研究主題小学校・中学校の一貫した教育を目指す小学校教育課程の研究(第2年次)』(1979年6月)(以下、初等教育研究会要項は『要項』と略記する)である⁵。

『要項』(1979年度)には、第1学年「合科(理科・図画工作科)的学習指導案」が掲載されている。単

元は「なぜであそぼう」であった。同指導案は理科と図画工作科の「合科的指導」を試みたものであることが記されている。

「合科的指導」の意義に関しては、「合科的指導をすることによって、子供の学習が生き生きとし、ゆとりを持った楽しいふんい気の中で学習が成立するのも大切であろう」と記され、「ゆとりを持った楽しいふんい気」が重視されている(pp.10-11)。

1979年度の担当者は、野沢清悟、内田幸雄、中条武、渡辺正路、岡村丈であった。

(2) 1981年度

研究開発学校最終年度の『要項』(1981年度)には「総合的学習」の学習指導案(第1、2学年)が掲載されている⁶。

第1学年は単元「夏をさがそう」、第2学年は単元「せんべいの ふるさとを さがそう」が設定されていた。

「提案者」すなわち附小担当教員は、野沢清悟、長村功之、川村滋、松本忠、堀田由美子であった。

(3) 研究開発の過程

1982年3月には、宇大附幼・同附小『昭和56年度 教育課程の基準改善のための教育研究開発に関する報告書 幼稚園及び小学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発』が発行されている⁷。同報告書は、「第3年次までの研究成果をまとめたもの」とされる(「まえがき」より)。

同報告書表紙裏面に「研究委嘱事項」が次のように記されている。

幼稚園及び小学校において、幼児・児童の心身発達に対応して、幼稚園及び小学校の教育の連携を図る教育課程の研究開発を行う。

同書には「研究開発の経緯」が年表風に記されている(11-13ページ)。

「研究開発の経緯」によると、「第1年次」(1979年)の4月に「研究委嘱事項の理解と研究組織及び研究計画を立案する」ことから始まり、5月には「54年度の研究計画を協議し、本年度研究の重点と具体策について、検討」したとされる。

当初は「文献研究を中心」とされたが、10月に「研究保育」で「遊園地ごっこ」より、総合的な指導

について考え」とともに、「研究授業」として「学芸会に参加しよう」を実験単元として設定した。11月には「総合的学習についての、本校としての仮説を考え」た。

以後、「研究開発校実地調査」「運営指導委員会」「調査官による指導」、研究保育、研究授業を繰り返し、単元開発が行われた。報告書では、初年度から「総合的指導」（幼稚園）、「総合的学習」（小学校）という用語が用いられていた。

こうして幼児・児童の心身発達に対応した幼稚園・小学校連携の教育課程開発を検討する過程で、幼稚園の「総合的指導」、小学校の「総合的学習」の実施が検討された。

(4) 「総合的学習」の背景・意図・単元

同書のなかでは、小学校「総合的学習」設定の背景が次のように記されている。

子どもにとって幼稚園の総合的保育中心の生活が、卒園して1か月も経過しない間に、小学校に入学すると一斉授業の形態で、しかも単位時間で教科等に分化された内容を学習するという生活へと急変する。そのため、楽しいはずの学校が、月日とともにつまらなくなってくる傾向がある。(中略) また、現在まで実践してきた、各教科・道徳・特別活動の三領域の教育活動において、豊かな人間性を目指すには達成十分ではなかった。それは、ややもすると各教科の指導に重点がかかり、子どもが主体的に活動し、満足感や充実感を味わうような教育活動をしてきたかどうか反省の余地がある。(中略) そこで、わたしたちが新しい方法として考え出した教育活動は、子どもの身近な遊びや生活を基盤とし分科の枠をはずし三領域にまたがる総合的なものである。子どもの見る・聞く・話す・触れる・描く・作る等の具体的な活動を通じた体験活動を根幹にすえた学習ができるように、教材を工夫していくことを試みようとしたのである。このように子どもの生活を中心に体験的な活動を考えていくことが、より豊かな人間性のある子どもを育成できるのではないかと考えた。そこに「総合的学習」が生まれたのである。

このように、附小「総合的学習」は「子どもの身近な遊びや生活を基盤とし分科の枠をはずし三領域

にまたがる」ものであり、「子どもの生活を中心に」した「体験的な活動」を根幹にすえた学習であった。

ただし、低学年の教育をすべて「総合的学習」とすることは考えていなかった。「本校の教育目標の実現の面から」「発達や発達段階の面から」「幼小連携を図る教育課程の面から」、この3つの視点から「総合的学習とともに各教科学習も実践していくこと」とし、「系統性を重んじた学習として」「言語・数量・音楽・体育」をあげた。こうして、「総合的学習」と国語、算数、音楽、体育の「各教科学習」の2領域が設定された。

社会科、理科、図画工作科で「総合的学習」が校正されようとしていた点は、その後成立した生活科に近く、宇大附小の検討においてすでに原形が形成されていたと考えられる。ただし、「総合的学習」は茨大附小において先行実施されており、同校の取り組みとの関係が問われなければならないが、今回は検討できていない。

週当たりの授業時数は各9時間が充てられた。単元構成は表のとおりである。

表1 「総合的学習」の単元構成（1981年度）

6 才 児		
月	単 元 名	時数
4	楽しい学校	13
	わたしたちの学校	10
	春をさがそう	7
5	おとうさん・おかあさんありがとう	10
	楽しい給食	6
6	雨の日	8
	動物とあそぼう	8
	夏をさがそう	15
7	楽しい七夕祭り	15
	水あそびをしよう	15
	楽しい夏休み	8
9	山荘学習	9
	虫と仲よく	9
10	学校のまわり	12
	附小まつり	10
	えほんをつくろう	9
11	秋の野山の探検	13
	学芸会に参加しよう	28
12	冬のしたく	9
	年賀状を作ろう	12
	楽しい冬休み	8
1	楽しいお正月	10
	私のアルバム	10
2	冬のあそび	10
	豆まき	6
	かけ絵あそび	9

3	ひなまつりをしよう 6年生ありがとう 1年の思い出	15 6 15
7 才 児		
月	単 元 名	時数
4	楽しい学校 春の野山めぐり	16 16
5	せんべいのふるさとをさがそう 動くおもちゃを作ろう	20 13
6	夏の生き物を調べよう	18
7	夏休みの生活	16
9	秋を調べに行こう 秋祭りをしよう	16 16
10	お店やさんごっこ	22
11	学芸会に参加しよう	28
12	年賀状と郵便局	22
1	冬を調べに行こう 友達の家をたずねよう	12 20
2	駅の見学をしよう	20
3	楽しい思い出を作ろう	20

1989年改定小学校学習指導要領「生活」では、次のような教育目標＝内容が示されていた（以下、可能な限り分節化し、表記は一部簡略化した）。

- ・学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かる。
- ・学校において楽しく遊びや生活ができる。
- ・安全な登下校ができる。
- ・家族の仕事や自分でしなければならないことが分かる。
- ・（家庭生活において）自分の役割を積極的に果たす。
- ・健康に気を付けて生活することができる。
- ・日常生活に必要な買い物等ができ、人々と適切に対応することができる。
- ・小学校入学後、自分でできるようになったこと、日常生活で自分の役割が増えたことがわかる。
- ・（自分の役割等に気づかせた上で）意欲的に生活することができる。
- ・自分たちの生活は多くの人々とかかわり、支えがあることがわかる。
- ・近所の公園などの公共施設はみんなのものであることが分かり、それを大切に利用することができる。
- ・乗り物や駅などの公共物のはたらきやそこで働いている人々の様子が分かり正しく利用できる。
- ・身近な自然を観察し季節の変化に気づく。
- ・（季節の変化に合わせて）生活することができる。
- ・身近にあるもので遊びに使うものを作ったりして、みんなで遊びを工夫することができる。
- ・動物の飼育、食物の栽培をとおして生命の存在や

成長に気づき、動植物を大切にすることができる。
・四季の変化や地域の生活に関心をもち、季節や天候などによって生活の様子が変わることによって気づき、自分たちの生活を工夫したりすることができる。

上記の89年改定「生活」と比較すると、宇大附小「総合的学習」は「生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」という要素が含まれていないように思われるが、学校生活理解、家庭生活理解、公共施設・公共物利用、自然観察・季節の変化の理解、動植物への飼育・栽培など、89年改定「生活」の要素はほぼ含まれていると考えられる。

(5)「総合的学習」の児童・保護者の反応

『研究論集』には、「子どもの反応と保護者の意見」が記録されている⁸。

総括的考察として、単元全体に関して次のように記されている。

全体的に見て、5や4の段階に8割ぐらいの反応が見られているので、子どもの取り組み方としては、よかったのではないかと思う。

「5」は「よい」、「3」が「ふつう」、「1」が「悪い」であるため、上記の記述は、「総合的学習」に対する児童の評価は「よい」と感じた児童が多かったことを表している。

各項目で「2」「1」を選択した児童の回答には、「よく作れなかった」「よく見学できなかった」「おしゃべりをしてしまった」「余り手を出さなかった」といった記述があり、「指導の足りない部分も感じとった」と記されている。

「5」が多かった単元としては「お店屋さんごっこ」、「動くおもちゃ」があり、これらに関しては、「自分から試行錯誤を繰り返しながら作品となって仕上がっていくことなどから、子どもは楽しんで学習していた」と記されている。

最も「5」が少なく、「3」が多い単元としては「電車ごっこ」があり、同単元に関しては、「宇都宮駅見学をスタートに考えたが、駅自体がマンモス化してしまい、駅で働く人々の苦勞や工夫などが見られなかったことが、つまずきの第1歩でした。次の電車作りにおいて、丈夫にという点の指導に甘さがあり、子どもが十分満足のいくような電車ごっこがで

きなかったことから反省が悪くなっている」と原因分析と反省が記されている。

表2 「総合的学習」に対する児童の評価

単元名	よい		ふつう		悪い
	5	4	3	2	1
1 楽しい学級	15	7	8	1	0
2 春の野山めぐり	15	9	6	1	0
3 せんべいのふるさと	14	9	6	2	0
4 動くおもちゃ	21	7	1	3	0
5 夏の生き物調べ	14	10	4	2	0
6 夏休みの生活	15	9	4	1	2
7 秋を調べに行こう	15	8	8	1	0
8 秋祭りをしよう	15	6	6	2	2
9 お店やさんごっこ	22	4	2	1	1
10 学芸会に参加しよう	15	8	7	1	0
11 年賀状と郵便局	18	5	5	3	0
12 冬を調べに行こう	15	9	4	3	0
13 友達の家を訪ねよう	12	8	7	1	2
14 電車ごっこ	10	5	13	5	0
15 楽しい思い出作り	12	10	3	2	1

保護者の感想や意見も集められ、記録されていた。保護者の感想等は、次のように総括されていた。

総合的学習を始めた当初は、不安も感じていたようです。しかし、日を追うごとに子どもの口からの報告や、家へ帰ってからの行動の違いなどから、総合的学習はすばらしい方法ではないかと思われるようになったということです。初めの頃にもう少し具体的な話が聞けたなら、なおよかったという意見も寄せられた。(6ページ)

このように、子どもの行動に変容が見られ、そこから保護者にも学校の取り組みが理解されていたことが窺われる。

4. 研究開発学校指定年度終了以降

着目すべきは、研究開発学校指定年度終了以降も合科的学習指導の実践と研究は継続されたことである。『研究紀要』、『要項』に記録が残されている。

【1982年度】

1982年度の『研究紀要』（第17号）によれば、附小は「合科的学習」「総合的学習」「創意活動」を設定して取り組んでいた⁹。

「総合的学習」は1979年度の文部大臣からの研究

委嘱に基づいて取り組んでいるものであることが記されている。「委嘱内容の幼小連携を考えるために、幼稚園教育と小学校教育の違いをさぐることや子どもの発達の姿などを追求し」、「その結果として、新しい小学校低学年教育として総合的学習を考え」たとされる（11ページ）。

「合科的学習」は、「自己実現をめざす教育を指向し、教育課程全般に創意ある教育を展開しようと努力し」、「その一環として、より充実した学習活動を展開させ学習成果の質の向上を意図し」、中学年に「合科的学習」を導入することになったという。具体的には「各教科の学習内容を総合的にみて、共通の学習活動による単元構成が可能か否かの検討をし、充実した学習活動の場を確保」するものであったとされた（27ページ）。

「創意活動」は、主として第3学年以上の学年、学級で実施し、「一週間の特定の曜日に時間をとることが望ましいということになり、週日課上に時間を位置づけて実施することとされた。具体的には、毎週金曜日の第6校時の学級の時間のなかで実施した（44-45ページ）。

【1983年度】

『要項』（1982年度）には、以下の「合科的学習」の学習指導案が掲載されている¹⁰。

第1学年「合科的学習（図工、国語、社会、理科）指導案」、単元名「夏をさがそう」

第2学年「合科的学習（社会・国語・図工）指導案」、単元名「せんべいのふるさとをさがそう」

第3学年「合科的学習（理科・国語）学習指導案」、単元名「ヘチマのかんさつをしよう」

「提案者」は、高田雄康、恩田稔雄、渡辺正路、堀田由美子、出井幸夫、九津見幸男、小倉伸一であった。

第3学年でも「合科的学習」が行われており、「合科的学習」の拡張として着目される。

【1984年度】

『要項』（1984年度）には、次の学習指導案が掲載されている¹¹。

第1学年「合科的学習（理科・図工・音楽）指導案」、単元名「むしさんこんにちは」

第2学年「合科的学習（国語・李か・図画工作・体育）指導案」、単元名「水ぞくかんをつくろう」

「提案者」は記載されていないが、「授業者」とし

て久郷純子、出井幸夫、渡辺正路の氏名が掲げられている。

「むしさんこんにちは」「水ぞくかんを作ろう」は、1983年度以前には見られない単元名であり、改良のために努力した形跡が窺われる。

【1985年度】

『要項』（1985年度）には、次の学習指導案が掲載されている¹²。

第1学年「合科的学習（理科、音楽、図工、国語）指導案」、単元名「むしさんこんにちは」

第2学年「合科的学習（理科・図画工作）指導案」、単元名「ぼく、わたしのゆうえんち」

「提案者」は、出井幸夫、柏村政、小林時久、佐藤信行、久郷純子、松島由美であった。

「ぼく、わたしのゆうえんち」は新たな単元名である。

【1986年】

『要項』（1986年度）には、次の学習指導案が掲載されている¹³。

第2学年「合科的学習（国語、社会、図工）指導案」、単元名「せんべいのふるさとをさがそう」

「提案者」は記載されていないが、「授業者」には出井幸夫の氏名がある。

【1987年度】

『要項』（1987年度）には、次の学習指導案が掲載されている¹⁴。

第1学年「合科的学習（社会、理科、図画工作、国語）指導案」、単元名「こうえんにいこう」

第2学年「合科的学習（理科、国語、図画工作、体育）指導案」、単元名「池をつくろう」、「絵本をつくろう」

「提案者」は、櫻井正美、柏村政、鈴木洋子、高梨敏朗、久郷純子、出井幸夫、小堀由美であった。

「こうえんにいこう」「池をつくろう」「絵本をつくろう」はいずれも新たな単元名である。

【1988年度】

『要項』（1988年度）には、次の学習指導案が掲載されている¹⁵。

第1学年「生活科学学習指導案」、単元名「公園で遊ぼう」

第2学年「生活科学学習指導案」、単元名「土はまほう使い」

「提案者」は、櫻井正美、高野章一、出井幸夫であった。

1988年度には「合科的学習」は見られなくなり、「生活科」が設定されていたことは着目される。以後、「合科的学習」は見られない。

「土はまほう使い」のように、「土」に着目した単元はこの時が初めてであると考えられる。

【1989年度】

『要項』（1989年度）には、次の学習指導案が掲載されている¹⁶。

第1学年「生活科学学習指導案」、単元名「わたしの家から学校まで」「生き物を育てよう」「友だち何人できるかな」

第2学年「生活科学学習指導案」、単元名「土はまほう使い」「生きものと友だちになろう」「でん車にのって川に行こう」

「提案者」は出井幸夫、大橋幸雄、中山和彦であった。

以上のように、「合科的学習」は研究開発学校指定直後から研究が開始され、研究開発学校指定期間は「総合的学習」として単元開発に関する研究が行われた。研究開発学校指定終了以後も「合科的学習」として研究が継続された。1983年度には第3学年まで拡張されたが、その後は低学年で行われ続けた。

5.まとめにかえて

以上のようにみてきて、次のことは指摘しておきたい。

- (1) 宇大附小は、小学校・中学校一貫教育を志向した「小学校・中学校の一貫した教育を目指す小学校教育課程の研究」の第2年次に文部大臣から委嘱され、附幼とともに幼小連携の教育課程開発に取り組むことになった。同様のテーマの研究開発学校では第二期に属する研究開発学校の一つであった。幼小連携教育課程開発のなかで「総合的学習」の単元開発が附小のテーマになった。
- (2) 委嘱研究に取り組んでいた間、公開研究会では当初、低学年の「合科的学習」として研究発表し、後に「総合的学習」として発表していた。この間、一貫して関与していたのは、野沢清悟

であった。

- (3) 社会、理科等により「総合的学習」を構成しようとした点、学習指導の内容の点で89年改定「生活」の要素は宇大附小「総合的学習」においてほぼ出そろっており、附小の取り組みは生活科の原形をつくり、研究開発学校としての役割を果たしたと考えることができる。
- (4) 附小は委嘱研究終了後も「合科的学習」に取り組んだ。時には第3学年でも「合科的学習」を設定し、「合科的学習」の拡張が図られていた。確認した限りにおいて、1983年度から89年度まで継続して関わったのは出井幸夫であった。この「合科的学習」は生活科が設置されるとみられなくなった。

このように、野沢、出井らを中心に宇大附小は「合科的学習」の単元開発に取り組んできた。生活科が登場すると、「合科的学習」は設定されなくなるが、1982年から88年度まで附小が学習指導要領には記されていない事項に自主的に取り組んできたことは注目されてよいように思われる。

学部一附属学校園の共同研究体制が組織され、研究開発学校指定時と同様の状況におかれている。宇大附属学校園として小学校低学年の学習指導を考える場合、生活科以外の教科との関係、中学年との関係、単元の見直し・開発などは今一度検討してみる必要があるのではなかろうか。いずれにしても、上記の1979-88年度のような創造・開拓の精神を継承することができれば、と考えている。

参考文献

- ¹ 詳細は、宇都宮大学共同教育学部・宇都宮大学共同教育学部附属学校園編集・発行『連携研究プロジェクト研究概要集 2020(令和2)年度』を参照。
- ² 宇都宮大学教育学部附属小学校百十年史編集委員会編『宇都宮大学教育学部附属小学校百十年史』1987年、766-767ページ。
- ³ 吉富芳正・田村学『新教科誕生の軌跡 ―生活科の形成過程に関する研究―』東洋館出版社、2014年。
- ⁴ 吉富芳正・研究代表者『平成22年度～平成24年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 生活科の形成過程に関する研究 ―協力者会議資料や協力者インタビュー調査等を通して―』2013年、9-10ページ。
- ⁵ 宇大附小『初等教育公開研究会要項 第1日 研

究主題 小学校・中学校の一貫した教育を目指す小学校教育課程の研究(第2年次)』1979年、10-11ページ。

- ⁶ 宇大附小『公開研究会要項 研究主題 自己実現をめざす教育の構想と展開 ―子どもの活動や経験を重視した指導のあり方― 第1日』1981年、10-17ページ。『同 第2日』、8-9、18-19ページ。
- ⁷ 宇大附幼・宇大附小『昭和56年度 教育課程の基準改善のための教育研究開発に関する報告書 幼稚園及び小学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発』1982年3月。
- ⁸ 宇大附小『研究論集』第3号、1982年、5-6ページ。
- ⁹ 宇大附小『研究紀要』第17号、1982年、1-6ページ。
- ¹⁰ 宇大附小『公開研究会要項 研究主題 自己実現をめざす教育の構想と展開(第3年次) ―情意的領域の評価を導入した授業の改善― 第1日』1983年、6-9、16-17、22-23ページ。
- ¹¹ 宇大附小『公開研究会要項 研究主題 自己実現をめざす教育の構想と展開(第4年次) ―情意的領域を重視した形成的評価と授業の改善― 第1日』1984年、8-9、12-15ページ。
- ¹² 宇大附小『公開研究会要項 研究主題 自己実現をめざす教育の構想と展開(第5年次) ―一人ひとりの情意を育て、能力をよりよく伸ばす授業― 第1日』1985年、8-9、14-17ページ。
- ¹³ 宇大附小『公開研究会要項 研究主題 個を生かす授業の創造(第1年次) ―子どもの能力や特性を生かした授業の構想― 第2日』1986年、8-9ページ。
- ¹⁴ 宇大附小『公開研究会要項 研究主題 個を生かす授業の創造(第2年次) ―子どもの能力や特性を生かした授業の実践― 第1日』1987年、20-27ページ。
- ¹⁵ 宇大附小『公開研究会要項 研究主題 個を生かす授業の創造(第3年次) ―一人ひとりの子どもが、自分の能力や特性に応じて主体的に学習に取り組める授業の追求― 第1日』1988年、6-13ページ。
- ¹⁶ 宇大附小『公開研究会要項 研究主題 個を生かす教育課程の編成と実践(第1年次) ―学習指導要領改善の趣旨を生かした、生活科の実践と各教科等の新指向― 第1日』、1989年、6-17ページ。

令和3年4月1日 受理

Elementary School and Kindergarten attached to
the Faculty of Education Utsunomiya University
and Elementary School Subject
"Living Environment Studies" Established

Tsuyoshi MARUYAMA, Yoshiaki KAWASHIMA ,Kohei FUKUDA,
Yu OGASAWARA, Tomomi INAGAWA, Shuko SAKAMOTO